

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

＊＜＞で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

☆新キャラ

1. ロープの者＝黒帝 龍冴
2. プロフェッサー
3. 中峰 蒼凱（なかもね そうがい）

～第8章～<閃光の先に>

二つ目の狙撃事件が発生した現場にきなこ達、国際二課の刑事達は居た。

長距離からの一発の狙撃であった。

しかし、発砲地点から被害者を狙撃するには優れて技術が必要であった。

それは、ビルとビルの谷間からの狙撃であった。本来、このような所からでは強いビル風、突風により狙いがずれてしまう可能性が高いのである。

しかし、今回の狙撃はそれを計算に入れた狙撃であった。

まさに、経験がモノを言うといった感じである。

きなこ船木は、今回発砲地点に行って見る事にした。

「こんな所から被害者を狙撃できるとは、、、。」と船木は強いビル風に襲われ驚きつつ言った。

きなこはさっきまで凱歌が構えていたであろう位置にしゃがんでいた。凱歌の気持ちになるように。

「でも、どうしてこんなに失敗の可能性の高い所から狙撃したんでしょう？

もっと成功率が高いチャンスがあった筈なのに、、、。」ときなこは言った。

「それは、1 2 1 1 が天才スナイパー王 凱歌が復活した事を世界に知らせる為ですよ。」

二人が振り返ると碧河が静かに立っていた。

しかし、その顔は、まるで、この狙撃を自分で行なってしまったかの様に悲しげであった。

そして、その手には不思議な大きめのトランクがあった。

碧河は静かにきなこがしゃがんでいる近くに来て、おもむろにトランクを開けた。その中身は、、、。
”ステア AUG”だった。それにきなこ達は驚き、碧河から離れた。

碧河は手馴れた感じで組み立て、狙撃地点に”ステア AUG”を向けた。

その時の目は、スナイパーの凱歌の狼の目だった。鋭い眼光で、スコープを覗いていた。

その時だった冷たさを秘めた声が響き渡った。

「君がそこで”ステア AUG”を構えるとまさに王 凱歌だな。しかし、君は姿こそ同じだが、凱歌にあって君に無いものがあるな。それは狙撃の才能だ。でも、君にあって凱歌に無いものは多い。例えば、自由なんてものだ。でも、君がそこで構えれば凱歌の心境が分かるかもしれない。

だが、王 凱歌に感情があればだかな、、、。」

きなこ達、その場に居たものは声の主を探した。しかし、見つからない。碧河は振り返らず言った。
「どういう意味ですか？”感情があれば”とは。」僅かではあるが、怒りが籠もっていた。

この問いにまた冷たさを秘めた声が答えた。

「簡単だ。こんな所から狙撃しようとしたら、感情いや人間性は邪魔どころか、あれば成功は無いだろう。仮にも、ターゲットが店の前で写真を撮る予定で立ち位置まで決まっていたのなら話は別だが、そうでない以上、その人間の動きを見て予想し、撃つしかない。

この突風や強いビル風を完全に無視して狙撃する事になる。

だが、人間はそれほど優れてはいない。必ず反応してしまう。

ましてや失敗の許させない時ほど様々なものに気がいくものだからな。」

「では、凱歌は人間性がない機械にでもなったというのですか！！」と碧河は立ちあがり鋭い眼差しで一点を見た。

刑事達は碧河が見ている方向を向いた。

そこには、頭にフードを被り、ひらりとしたローブのような物を纏った者が立って居た。

そのローブの者は冷血に答えた。

「そうだ。それ以外には説明が付かない。いくら訓練したとしても不可能だ。

お前も分かっているはずだ！特殊な人間でない限りは不可能だ。だが王 凱歌は普通の感情を持った人間だ。王 凱歌は死んだも同じだ！これが真実だ。」

この言葉にきなこは衝撃を受けた。

この冷血な言葉の中に、ホイさんの意志でない可能性があると思えたからである。

しかし、最後の”王 凱歌は死んだも同じだ！”という言葉が胸を突いた。

碧河は、今までにない怒りが籠もった声で言った。

「”王 凱歌は死んだ”とはどういう意味ですか！」

「別に本当に死んだわけではない。俺が言っているのは、肉体的にではなく精神的に、つまり”心”が失われた事を言っているのだ。」と冷静に答えた。

周囲に居た刑事達は、この飛び抜けた会話についていけなかった。

そんな中できなこは聞きたくなった。”可能性”というものを。

「ホイ、、、王 凱歌の人間性。つまり”心”が戻る事はもうないの？」

それに対してローブの者は少しの間の後、困った感じで答えた。

「今の状態では不可能に等しいだろう。ただ、”心”を大きく揺れ動かす事が出来れば、目覚めようとするかもしれないが、、、難しいだろう。目の前で”大切な人”が死ぬぐらいないと無理だろう。しかし、逆に完全に”心”が死んでしまう恐れの方が高い。」

この言葉に、”元の優しいホイさんには戻らない。”という事実が押し掛かった。

「但し、今の状態ではだが。」と付け加えた。

そして、暫しの間の後、ローブの者が動いた。

「俺はそろそろ行くとするか。刑事さん達、頑張って王 凱歌を早く捕まえないと、本当に王 凱歌は死ぬ事になるぞ。」と言い立ち去ろうとした。

その言葉にきなこはすぐに反応した。

「それはどういう意味！」

きなこの言葉にローブの者は振り向き、言った。

「人間には、無意識に力を制限している。それを”リミッター”という。これは無意識とは言え、体を守るために意識下にあるものだ。機械の様に操られているという事はこれがきかないという事であり、最大の力を常に出し続ける事になる。そのままでは、いつか肉体、精神が崩壊する事になる。今日だけで有り得ない技術、距離からの狙撃で、大きな負担が掛かっている。

1211は、王 凱歌の力が欲しいとは思っているが、本当に欲しいのは王 凱歌が居るという後ろ盾だ。それを知らしめる事が出来れば後は。言い方は悪いが必要的な訳だ。」

これには周囲に居る者は納得すると同時に、凱歌の腕が上がっていた理由も分かった。

きなこには、最後の”必要的な訳だ。”という言葉が大きく胸を引き裂く様だった。

そして、ローブの者は皆が納得している間に碧河の持っていた”ステアAUG”を持っていた。そして、碧河しか聞こえない様に何か言い、居なくなっていた。周囲の刑事が気付かぬ間に。

ビルの下では、ローブの者が車に乗ろうとしていた。運転席には別の者が居た。その者と話していた。「あんな大勢の前で、演説なんかしたら怒られますよ。」と優しく言った。

「心配ないさ。俺の事は碧河以外分らないし、言っておくべき事に変わりはあるまい。せいぜい始末書程度だからな。後で碧河が報告に来るだろうしな。」とローブの者が答えながら、”ステアAUG”を片付け終えた。

運転席の者が「それならいいんですが、。。。」と言い車を発車した。

－ 1 時間後 －

現場検証を終え、国際二課に戻ってきた。

しかし、刑事達は先ほどのローブの者が言った言葉が重く押し掛かっていた。

『それを知らしめる事が出来れば後は。言い方は悪いが必要的な訳だ。』

この言葉に刑事達は、1211の恐ろしさと人を人と思わない冷酷な行動に腹を立てていたし、自分達の力の無さを痛感していた。”何とかしたい”と誰もが思っていた。

刑事達は、必死に聞き込みなどをした。

～第9章～＜コー村木の思惑＞

－ 3 日後 －

朝から、昨日までの捜査状況が報告された。しかし、逃げる凱歌を見た者は居なかった。

国際二課は、この状況に静まり返ってしまった。

その時、突然きなこの携帯が静けさを突き破る様に鳴った。その場に居た刑事達は驚いた。

きなこは慌てて携帯に出た。船木らはきなこを置いておいて報告を続けていた。

「やあ。発砲地点にしゃがんでいた女性刑事さんだね。この前はすまなかったな。色々と言ってしまって。他かの刑事さん達が居ない所に行ってくれるかな？話がしたい。」とあのローブの者の声だった。

きなこは自分の携帯番号を知っているのか驚いたが、もっと色々な事を知っていると思い、聞き出そうと、言われた通り誰も居ない部屋に行って話した。

「来たわ。でも、言ってくれたお陰で状況がよく分かったからいいですけど。

でも、貴方は一体何者なの？」

「俺は名乗るほどの者ではないが、王 凱歌が、死んでもいいとは思っていない者だ。

凱歌には人間として優れていると思っているから、助けたいんだ。

まあ、君とは”同志”と言った所かな。しかし、良かった。言った事が役に立っている様で。」

「でも、どうして私の携帯に。言いたい事があったら、国際二課に電話すればいいのに、。。。」

「君に直接言いたい事があるんだ。言いづらいけど考えて欲しい。

”心”を失った凱歌を1 2 1 1は一人で働かせるかな？判断力の無い者を。

そして、邪魔な組織を潰した1 2 1 1は、次は何ををすると思う？」

「ええ？でも、確かに凱歌は誰かに指示されて動いていると考えるのが妥当だと思う。」

「その通り！あれ？凱歌のこと、今日は”ホイ”とは呼ばないんだよ。まあいい。

そして、屋上で言ったよな～？大切な人が目の前で死ぬぐらいの衝撃によって凱歌の”心”が完全に失われる可能性が高いって。もしそれが自分の意志に関係無くとも

自分の手で殺してしまったら、。。分かるはずだ。」

「まさか！でも、誰を？」

「王 凱歌を止めることが出来るのは君だけだ。多くの刑事達で行動しても、王 凱歌には勝てない。それどころか怪我人が出るだけで終わる。君一人で行動すれば、凱歌を直接止められるかもしれないから連絡したんだ。で狙うとしたら、母親だが、殺すことはできないだろう。」

「どうして？一番大切な人じゃない？」

「確かに、凱歌は母親に逢いたいがためにスナイパーになったぐらいだから当然だ。

しかし、それほどまで大切な人を自分の手で殺めたら、ショック死してしまうだろうからな。

第一、出来ないだろうからな。いくら、”心”を無くしていると言っても僅かでもあるだろうから、自分を止めるはずだ。失敗すると思う。」

「じゃあ、誰を狙うの？」

「それは俺の口から言わなくても分かるはずだ。でも、一応凱歌の母親の方も行った方がいいだろうな。1 2 1 1がそこまで気を使うとは思えないからな。それじゃあ、頑張れよ。時間は無いぞ。」とローブの者が言い終えると一方的に電話を切ろうとした時だった。

突然、碧河が部屋に入りきなこから携帯を取り、話し始めた。

「どうも、碧河です。どうして貴方は、勝手な行動をするんですか！

僕もきなこさんと行動しますからね。」

「おお！碧河～！悪いな。お前には後で連絡するつもりだったんだ。

でも、お前が一緒だったらより安心だ。俺らも行動を開始するから。よろしく。」

「分かりました。ですが、慎重をお願いしますよ。」と言い終えるときなこに携帯を返した。

「ちょっと！碧河さんとは知り合いなの？」

「え！まあ、知り合いかな、。。そんな事より恐らく今日、行動を起こすはずだ。二人とも頑張れよ！じゃあな。」と言い、ローブの者は電話を切った。

「ちょっと待って、。。切れた。」

きなこは、携帯をしまった。そして、碧河に言い寄った。

「あの人は誰なの！今まで気になっていたから聞くけど、貴方は何者なの！」

そのあまりのは激しさに碧河は壁際まで追いやられてしまった。

「えっと、。。何て説明していいのか。僕も全部言えるものなら言いたいのですがダメなんです！規定違反になってしまうんです！だから聞かないで下さい！いつか必ず説明しますから。」と押され気味に言った。

きなこは納得が行かず、どんどん碧河を問い詰め様とした。その時、碧河が。

「でも、早くしないと凱歌が動き出してしまいますよ。」

この言葉にはっとしたきなこはこの事は後に回し、急いで部屋を出ていった。碧河は助かったと思いつつ、一人で行ってしまったきなこを慌てて追いかけた。

きなこは国際二課に戻るなり、船木に「ちょっと出てきます。」と言い、荷物を持って出ていった。入り口ですれ違った碧河も入り口で同じ様に船木に「きなこさん行けて来ます。」と言ってきなこの後を追った。

残させた船木ら国際二課の面々は呆然と入り口の方を見ていた。

きなこと碧河は車で一路、王 凱歌の母、島村市江の入院している病院へ。

しかし、その光景を見ている者が居た。インカムを外すローブの者だった。しかし警視庁の屋上から。そして、振り返り言った。

「さあ！俺達も行動開始だ。はり切って行きましょうか〜！」

この声にローブの者の後ろに居た青年は「やりましょうか。」と冷静に言い、老人が「頑張るか、。。」と元気の無い声で言った。

「まずは、”鍵”を集めないとな。でも、あの刑事さんには悪い事をした。

1 2 1 1は確実に凱歌の母親を狙ってくる。蒼凱、明希ちゃんを連れて来てくれ。あんたは、待機かな？」と老人に指を指しながら言った。

蒼凱と呼ばれた者は「分かりました。」と言い、向きを変え歩き出した。

老人は指を指された挙句、”あんた”呼ばわりが嫌だったらしく皮肉めいて言った。

「わしは待機じゃな。」と。

そして、ローブの者も「俺は凱歌の直接搜索かなと。」と言い、歩き出した。

謎の3人が動き出した、。、。強い力を感じさせながら、。、。

ー市江が入院している病院ー

きなこと碧河は、市江が入院している部屋に直行した。

二人が市江の病室のある階に着いた時だった、ガラスが割れるような大きな音が市江の病室の方からした。

二人は急いで音のした方へ向かった。予想していた通り、音は市江の病室からだった。

二人が病室に入ると、市江のベッドの前にある窓のガラスに小さな穴が開いていた。

そして、ベッドの横にあった花瓶が粉々になっていた。

ベッドには、市江が呆然としていた。きなこは市江の心臓を気にしていたが、大丈夫だった。そんな時、碧河が居なかった。

碧河は、発砲現場に向かっていた。きなこは窓から外を見た。

そして、この病室がいかに狙撃し易い事に気が付いた。

この病室の向かいのビルからここまで200メートルと無く、こっちは良く見ないと見えない地点であるが、相手からは良く見える所であった。

だからこそ、きなこはあのローブの者が言った事がよぎった。

『いくら、”心”を無くしていると言っても僅かでもあるだろうから、自分を止めるはずだ。失敗すると思う。』

この言葉の通り、ホイさんは必死に自分を止めようとし、狙撃に失敗したのである。

きなこはまだ、希望がある事を実感していた。

現場に急いだ碧河はそこであのローブの者を見つけた。ローブの者は碧河に気付き、振り返った。

「すまん。間に合わなかった。でも、やはり王 凱歌は完全に支配されたわけでは無い事ははっきりした。しかし、これではすぐに次があるだろう。」と言った。

「ええ。そうですね。次は円道寺家の方々ですかね？」

「そうとしか考えられないし、それ以外に無いだろう。お前は第一の”鍵”と共に向かえ。

俺は、プロフェッサーが連れてくる第二の”鍵”を向こうで待ちながら指示してる奴を探す。

急げよ、次は無い！」

「分かってます！”鍵”を持ってすぐに向かいます。」と言い、碧河はきなこの居る病院に向かった。

ローブの者は、暫しその場に残り「早まってくれたものだ。まだ準備も終わっていないのに！」と呟き走っていった。

—病院—

きなこは市江を看護師に任せ、国際二課に連絡した。連絡を終えた時、碧河が走ってきた。

碧河は、慌ててきなこの手を掴み、車に向かった。

その最中に次はきなこの家族が危ない事を告げた。

きなこはあまりにも事の進み具合が速すぎて理解が出来なくなっていた。

今までの凱歌の行動からすぐにでも円道寺家の面々を襲う可能性が高いと言うのである。

そして、それは狙撃ではない可能性があるというのである。

理由は、狙撃は非常に精神的な負担が大きくましてや、母親を狙撃しようとした事でその負担は最高になっているので、狙撃は当分無理である事が想像できたからである。

もし、接近戦になれば、いくら少林寺拳法が出来る皆さんとはいえ力の差は歴然。

増してや逆にブレーキが利かなくなってしまう可能性が十分にあった。

きなこは碧河の言う事がどれも正論の様に聞こえた。いや正論だったのかもしれない。

急いで”紅龍”に向かった。しかし、この時、市江の狙撃から5分以上立っていた。

—紅龍—

紅龍では、円道寺家の面々が不思議な感覚に囚われていた。

『これからとんでもない事が起きる』そんな嫌な予感だった。

そんな予感に包まれていた店内に誰か入って来た。その入って来た人を見た瞬間、雁太郎は言った。

「ホイ？どうしてここに、、！」と言い終える前にその男は雁太郎に攻撃を仕掛けてした。

そう、入って来た男こそ殺人マシン化した王 凱歌だったのである。

その攻撃の破壊力は人間離れしていた。リミッターの外れた人間の力は通常時の

その人の倍以上の能力を発揮する。元から高い戦闘能力を持っていた凱歌が、倍以上の力で攻撃してきたら一溜りもない。

しかし、雁太郎は日頃の練習の成果か凱歌の攻撃をかわし、家族に逃げる様に言った。

家族達は何事かと店に出てきてしまった。すると、凱歌が雁太郎を殺そうとしているではないか！

はなは雁太郎を助けようと、対決の中に入ろうとした。しかし、雁太郎ははなに皆を外に出すように言った。雁太郎にはホイをここに居る誰もが止める事が出来ない事に気が付いていた。そう、ホイを愛しているきなこ以外にはと。

雁太郎は巧みに凱歌の攻撃を回避しながら外に出た。そこまでは良かったが、出た一瞬に隙を見せてしまった。雁太郎は、凱歌の攻撃を食らってしまった。

防御したものの2、3メートルは吹き飛ばされてしまった。そしてそのまま意識を失ってしまった。

凱歌は次にはなと美智にその色を失った目を、攻撃の刃を向けた。はなは雁太郎の元に向かった。雁太郎は口から血を流しながら倒れていた。はなは泣きながらホイに向けて叫んだ。

「どうして、こんな事をするの？いつもの優しいホイさんに戻ってよ！！」

しかし、凱歌は反応しなかった。むしろ、はなに攻撃の刃を向けた。

はなは静かに雁太郎を道角に寝かせると凱歌の方を向いた。そして、構えた。

怒りから今までにない本気の構えだった。それはきなこのものとは違う構えだった。

はなが先に攻撃を仕掛けた。凱歌はその攻撃を冷静に受け止め、すばやく反撃をした。

しかし、はなは凱歌の反撃を軽く避け、距離を取った。

先ほどの父との戦いを見ていた結果から攻撃はなんとしても受けない様にしていた。

激しい攻防が繰り返されていた。はなは凱歌に攻撃を何度か当て、ダメージを負わせていた。

しかし、相手は世界に名を轟かせているスナイパーである。すぐに、はなに不利になっていた。

はなが攻撃を受け、吹き飛んだのである。しかし、はなは何とか立ちあがった。

うまく衝撃を逃がす事が出来たのである。しかし、はなの体力は限界に来ていた。

ふらふらする足元で立っていた。このチャンスを凱歌は逃さなかった。

凱歌ははなに向かい、手刀を食らわせようとした。その時、凱歌の後ろから声が聞こえた。

「ホイさん！やめて！まだ”心”が残っているんでしょ！！」と。

そう、きなこが到着したのである。きなこはこの悲惨な状況に愕然としていた。

碧河の言った通り、狙撃ではなく直接だった。しかも、雁太郎とはながやられていた。

はなはきなこが来た事でほっとし、その場で意識を失ってしまった。

きなこは怒りに燃え、凱歌の前に立ちはだかった。

これから怒りに燃えるきなこ完全な殺人マシンと化した王 凱歌との対決が始まろうとしていた。

碧河はそれを感じ、的確に家族達を安全な所に運んで行った。

きなこは戦う前にもう一度話しかけた。

「ホイさん。もうダメなの、。くっ。王 凱歌！貴方を止める！！」

それは、自分に言い聞かせる様に言い切った。

今、凱歌ときなこの対決が始まる。そう、コー村木の”究極の悲劇”の幕が開かれた。

～第10章～＜究極の悲劇＞

凱歌ときなこの戦いは”壮絶”という言葉では言い表せないほど凄まじいものだった。

正に血で血を洗うと言っていいものだった。

（このアクションシーンは私では書けないので説明的なものを書きますが、皆様それぞれのご想像にお任せ致します。）

その戦いはとても長く感じられるものだった。しかし、あまりにも早い双方の動きに美智はついて行けなかった。そう、きなこはこの緊迫した中で”リミッター外し”を習得したのである。

そのリミッターの外れた人間離れした対決はやはり、ためらいの無い凱歌の方が優勢になっていった。

やはり、双方の攻撃がぶつかり合う時には男である凱歌の方が強いなど、徐々に差が出てきた。

そんな時、遂に勝敗を分ける一撃が出た。一瞬の隙を突き、

凱歌がきなこに正拳突きを浴びせたのである。これにより、5メートルは軽く吹っ飛んでしまった。

きなこは完全に動けなくなってしまった。凱歌は静かにきなこに近づいて行った。
きなこの前に立った凱歌は、きなこにとどめを刺そうと拳を引いた。
そして、凱歌が拳をきなこに向け、振った！
その一瞬、きなこは『ホイさんに負けた。でも、ホイさんにだったら、。。』と思い、目を閉じた。
しかし、きなこの予想に反して最後の衝撃が来なかった、。。。
きなこの右腕に暖かいものを落ちた。きなこはそっと目を開けた。そこには、。。。
拳をきなこの前で止め、その無表情な顔に、色が失われた瞳から静かに涙が流れ落ち続けていた。
きなこはこの瞬間はつきりと悟った。
『ホイさんの意識はまだ残っている。止めようと自分の体と戦っている。希望は残っていた。』と。
しかし、きなこの体は限界を超えた戦いからの負担と先ほどの攻撃で全く言うことを聞かなかった。
少しずつ拳がきなこに近づいていた。その静寂な長い時を突然破る一筋の矢が飛んできた。
「おにい〜ちゃん！！やめて！元の優しいおにいちゃんに戻って！」という声の矢が。
凱歌がきなこに向けて進めていた拳を止め、振り返った。
そこには、あの記憶を失った凱歌が優しくした女の子、明希が居た。
明希の言葉に、凱歌はきなこから離れた。しかし、凱歌はまだ自分の体を取り戻してはいなかった。
突然凱歌は明希に攻撃の刃を向けたのである。
しかし、その顔には明らかに拒否の反応が出てきていた。
凱歌が明希を襲おうとしている体を止めようとした。しかし、体は動かなかった。
きなこが、最後の力を使って、叫んだ。「やめて〜〜！！」と。

静けさが周囲を支配していた、。。。
そして、きなこが見たものは、先ほどまで明希が居た所に、あのローブの者が
凱歌の腕を押さえ立っていた。明希は、碧河に抱かれていた。
ほっとしたが、きなこは碧河とあのローブの者の脅威的な力を知った。
なぜなら、凱歌の攻撃が明希に当たるまで、5秒も無かったのである。
先ほどまで、姿さえ見えなかったのにあのローブの者は、明希と凱歌の間に入り、
凱歌の腕を押さえている。碧河は明希を抱き、元の位置から5メートルは離れていたのである。
「全く、ヒヤヒヤさせやがって！折角”心”が戻ったかと思ったが、こんな子供にまで手を出しやがって！
いい加減、目を覚ましやがれ！王 凱歌！！」とローブの者が言い、凱歌をほうり投げた。
凱歌は、反応せず、距離をとった。
「碧河。明希ちゃんは無事か？しっかりと距離を取っておけよ。」とローブの者は言った。
「ええ。明希ちゃんに怪我は無いです。貴方こそ大丈夫ですか？」と碧河は言った。
「この程度で怪我などするか！王 凱歌ごときにさ。
明希ちゃんにはこれからの俺の行動は見せるな！」
「分かりました。明希ちゃんは、僕が目隠ししておきます。」と碧河は答えた。
「おにいちゃん、どうしてあんな事するの？」と碧河に明希は聞いた。
「おにいちゃんは、悪い人に操られているんだよ。だから、元に戻さないといけないんだ。
だから、もっと呼びかえてくれるかな？」と優しく答えた。明希は「うん！」と元気に答えた。
ローブの者は凱歌の方を向き直し、構える凱歌に冷たく言った。

「今の俺は、いくら自由が聞かないからと言ってあんな子供に手を出した事に対して、それなりの罰は受けてもらおうぞ！」

碧河は慌てて言った。「例の事、言わないとあの方々に怒られますよ。」と。

ローブの者は「あっ！」と言い、付け加えた。

「王 凱歌、君を日本国家の名、権力の元で連行する。なお、拒否は一切認められない！執行人、黒帝 龍牙。以上。」

そう言い切ると、ローブの者は凱歌に”来い”と指で合図した。

凱歌はそれに従うかのように先行攻撃をしてきた。

しかし、まるで子供と遊んでいるかのように全く当たらない。

それどころか、凱歌のようが一方的に遊ばれていた。しかも、左手だけで防御していた。

凱歌が全く相手になっていなかった。物足りないような顔をしながら言った。

「もう終わりか？つまらん！さっさと終わらせよう。周囲に居る者、全員俺の近くから離れろ！行くぞ。」

そう言い終えると、ローブの者は脇から棒のような物を取り出した。

その棒は先に球のような物が付いていて、2段階に伸びる様だった。

長さは、伸びた状態で40cmぐらいだった。

碧河はそれを見た瞬間、「皆さん、金属からも離れてください。感電します！」と叫んだ。

ローブの者はその棒の持ち手の下にあるスイッチを入れた。

すると、棒の先にある球から電気が放電していた。”バチバチ”凄まじい音を立てていた。

空気中に電気が満ちていくのが感じられるほどだった。

「さぁ～。さっさとけりをつける。王 凱歌、悪いが一発で決めさせてもらう！行くぞ、雷如棒！」と言い、凱歌に向かっていった。

凱歌もローブの者に向かっていった。しかし、ローブの者は瞬時に凱歌の後ろに付いていた。そして、「みんな、目をつぶれ！」と言った。その瞬間、凱歌達の周囲が一瞬にして閃光が走った。

それは、落雷のような音と衝撃が周囲を包んだ。いや、落雷だったのかもしれない。

暫しの沈黙後、“ドサ”と人が倒れる音がした。王 凱歌が倒れたのである。

それが糸の切れた操り人形のようなようだった。

ローブの者は何か言いながら、“雷如棒”なる物のスイッチを切った。

その棒からの放電が止まっても周囲の空気はまだ電気を帯びていた。

ローブの者は倒れている凱歌を担ぎ、碧河の所に来た。

しかし、なぜローブの者は棒を持っていた左手を使っていなかった。

「やっぱり、左手ダメでしたか？」と碧河が言った。

「ああ、しびれてダメだ。触るか？感電するぞ。」と笑ってローブの者は答えた。

「しかし、“雷如棒”は改良の余地ありだな。」と言いつつ、凱歌を手早く担架に乗せていた。

そして簡単な処置をしていた。その慣れて手つきには、医者も舌を巻いてしまうの腕だった。

凱歌の処置が終わった後は、雁太郎、はなの順に見ていった。

どちらも、凱歌が手を抜いたのか、死に至る急所は攻撃を受けておらず、骨折も無かった。

但し、全身打撲だった。これを見たローブの者は、

「凱歌め。意外と制御できていたんじゃないか！全く、手間を掛けさせやがって。」と愚痴った。

そして、問題のきなこである。きなこの場合は、他の二人と違って、自らリミッターを外し戦った事から肉体を酷使し過ぎていた。

ローブの者は、「彼女も連れていくしかない。普通の病院では治らんからな。」と言った。
しかし、碧河を見てからもう一度、今度はきなこに言った。
「君を我々の”本部”に連れていく。いいか？もし、普通の病院なら一生、前の様には動けなくなる。
後遺症も残るだろう。しかし、我々の所なら前よりも調子よくする。
ダメなら俺はこの左手を切り落としてもいい。
そして、我々の所に来れば、王 凱歌がこんな事をした理由と俺達の正体を知る事が出来る。
決めるのは君だ。」ときなこに暖かさが籠もった声で言った。
きなこは、凱歌がこんな事をした理由が知りたかったし、彼らの正体も知りたい。
そして、彼らは信用できると思えた。そして、「連れていって、。ホイさんの事、貴方達の事知りたい！」
と言った。
「分かった。連れていこう。」と言った。その時だった、声が響き渡った。
＜王 凱歌を連れて行かれると困るんだよ！＞と。その声の主は、劉冥だった。
碧河とローブの者は同時に同じような事を言った。
「お前が、凱歌を操っていたんだな！」と。二人は同じような事を同時に言った事に笑っていた。
それが劉冥には、自分を笑っている様に見えたらしく「何がおかしい！」と怒鳴った。
二人は笑うのをやめ、周囲の気配を探った。20人近く敵がいる事を察した。
劉冥は、＜凱歌を取りもどれ！＞と言った。周囲から1211が出てきた。大体20人ぐらいが居た。
ローブの者は、“雷如棒”を右手に持った。碧河は、右手に拳銃”デザートイーグル”を構えていた。
二人は互いに背を向けた合わせに立っていた。
”デザートイーグル”とは、凱歌がエピソード1で大野社長に向けた拳銃である。
ローブの者はそれを見て、「いいな～。それとこれ、換えない。」と言って来た。
しかし、碧河は、「貴方は銃は持ってはいけませんが！」と一括した。
ローブの者は「ケチ」だのと文句を言いながら、構え直した。そして、。
＜忠告する！俺らの強さは半端じゃない。何せ、王 凱歌を倒したんだ。
死にたくなちゃ、5秒の内に去れ！！＞と宣告した。
やはり、動揺はしたものの引かなかった。これにより、相手の数は20人ぐらいと決まった。
二人は「多く倒した方が勝ちと言うことで、。。」とゲームでもする様に話していた。
そして、戦闘が開始されようとした時だった、新しい声が響き渡った。
「警察だ！全員動くな！逮捕する。」
そう、国際二課の面々が来たのだ。
「碧河。刑事さん達に連絡を入れたのか？」
「ええ、思っていたより早いですね。」と碧河とローブの者が話している時だった、
劉冥が逃げようとしていた。それに気が付いたローブの者が言った。
「碧河！アイツが逃げるぞ！」
「分かってます。」と言い、碧河は劉冥に向け、“デザートイーグル”を一発発射した。
発射した弾は、見事に左足に命中した。そして、「碧河、捕まえて来い。」とローブの者に押され、
走り出した。しかし、先ほどの発砲を合図に1211と国際二課の対決が始まってしまった。
ローブの者は、手伝おうとして見ると刑事達は1211達を圧倒していた。刑事達は強かったのである。
弱そうに見えた黒谷刑事は敵を見事な一本背負いで倒し、
新人の稲垣は合気道の達人らしく相手の力をうまく使い倒していった。

そう、国際二課の面々は何かしらの武術の達人だった。

ローブの者は刑事達の力に内心舌を巻きつつ1211は刑事達に任し、出発の準備を始めた。

ローブの者はきなこの家族にきなこを連れていく事、自分の事を言わないで欲しい事を伝えた。

家族達は了承してくれ、気付かれずに行こうとした。

しかし、1211を全員倒した刑事達に囲まれてしまった。

「えっ。もう終わっちゃったのか。仕方がない。説明するか。

あのう、船木課長ちょっといいですか？」と言った。

船木は自分の事をしていた事に驚きつつ、二人で話す事に。

「俺はこういうものです。見ても納得しないと思いますが、王 凱歌とあの女性刑事を連れて行かせて頂きます。了承して頂けますか？」と言い、身分証明のような物を見せた。

船木はそこに書いてある事、このような者がいる事が理解できなかった。

その反応を予想しつつ見ていたローブの者は、ある程度の説明をした。

それにより、船木は何となく理解してくれた。但し、船木だったからこんなに早く解ってもらえたのである。

船木は、刑事達に自分達を伏せて、別の説明をする事を約束してくれた。

但し、今は時間がないため、後で改めて説明する約束で、。

刑事達の気を船木が集めている間にローブの者は、きなこを担架に乗せようとしたが、痛がったので全身麻酔をする事にした。

きなこはそれを聞いて、明らかに不安を浮かべていたので、ローブの者が言った。

「心配するな。こう見えて俺は、ちゃんと医師免許を持っているから。着くまでの間だけだ。」

きなこはそれを聞いて安心して了解した。その後、碧河に言った。

「明希ちゃん、俺達と来てくれるかい。ケーキでもお礼に食べてもらわないとな。」

明希は嬉しそうに「ケーキ。ケーキ。」と何回も言って車に乗った。

ローブの者は静かに凱歌ときなこが寝ている担架を車に乗せた。

そして、劉冥を捕まえた碧河を乗せ”本部”と呼ばれる所に向けて出発した。

多くの秘密を抱えながら、。

ー続く